

## 大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 梁 開印

学位の種類 博士（書道学）

学位記番号 甲第180号

学位授与年月日 2024年3月22日

審査研究科 文学研究科

論文題目 二十世紀中国書法美学研究の実態と課題

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 河内 利治  
(副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘  
(副査) 大東文化大学教授 高橋 利郎  
(副査) 奈良教育大学教授 萱 のり子

## 博士学位申請論文審査報告書

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

### 1. 論文の目次

まず目次に従って全体構成を概観する。

#### 序章

まえがき／研究内容と目的／研究方法／先行研究／論文構成

#### 第一章 研究背景としての近代「美術」概念の輸入をめぐる中国「書法」の変質

- 第一節 古代中国の「美術」と「芸術」概念
- 第二節 日本の「美術」の概念の形成
- 第三節 「美術」の中国への輸入について
- 第四節 二十世紀初頭に中国における「美術」の使用状況
- 第五節 二十世紀初頭に中国における「芸術」の使用状況
- 第六章 書法を美術とする言論の考察

小結

(以上、第一部分)

#### 第二章 梁啓超の書法美学思想の考察

- 第一節 書法の本質観：「書法は美術である」について
- 第二節 書法美の解釈の仕方

小結

#### 第三章 張蔭麟の書法美学思想の考察

- 第一節 書法の本質観：「書法は芸術である」について
- 第二節 書法美の解釈の仕方

小結

#### 第四章 宗白華の書法美学思想の考察

第一節 書法の本質観：「書法は芸術である」について

第二節 書法美の解釈の仕方

1、宗氏の書法美学思想である「空間」をめぐる考察

2、宗氏の書法美学思想である「生命」をめぐる考察

小結

#### 第五章 劉綱紀の書法美学思想の考察

第一節 書法の本質観：「書法は芸術である」について

第二節 書法美の解釈の仕方

小結

#### 第六章 他の学者の書法美学思想の考察——鄧以蟄、林語堂、朱光潜、李沢厚

第一節 鄧以蟄に対する考察

一、書法の本質観：「書法は美術である」について

二、書法美の解釈の仕方

小結

第二節 林語堂に対する考察

一、書法の本質観：「書法は芸術である」について

二、書法美の解釈の仕方

小結

第三節 朱光潜に対する考察

一、書法の本質観：「書法は芸術である」について

二、書法美の解釈の仕方

1、朱光潜の感情移入理論

2、書法の境界についての区分

小結

第四節 李沢厚に対する考察

一、書法の本質観：「書法は芸術である」について

二、書法美の解釈の仕方

小結

#### 第七章 「書法美学」と名付けられた著作における書法美学の解釈の仕方の考察

——葉秀山、金学智、陳振濂、陳廷祐、尹旭を中心に (以上、第二部分)

#### 終章

第一節 書法の本質観：書法を芸術とする理論的根拠の研究

一、「書法は芸術である」という命題の誕生

二、「書法は芸術である」の理論的根拠の検討

三、「書法」と「芸術」両概念の矛盾

四、書法の本質観の把握

第二節 書法美学の解釈の仕方(対象・範囲・方法・立場)についての研究

一、書法美学理論の体系化の表現とその問題

二、書法美学研究の対象、範囲、方法

三、書法美の解釈における中西視点の問題

小結

各章の図解

結語

(以上、第三部分)

参考文献一覧

## 2. 論文の要旨および特色

(要旨)

研究目的

本研究は、二十世紀の書法美学の進展を研究対象とし、近百年の書法美学の展開の検討に重点を置き、主として二十世紀の書法美学の学術進展を推進する観点と論著を研究の素材とする。書法の本質観と書法美学の解釈の仕方(対象・範囲・方法・立場)の二つの問題を集中的に検討することによって、書法美学の理論体系の基盤を研究するものである。

特に「art」の影響下での書法本質に対する認識に着眼し、学者たちが書法を美術（芸術）とみなす理論的根拠について考察するとともに、書法美に対する解釈の仕方を探ることを行う。この二つ問題の検討を通して、書法の本質に対する認識を把握し、書法美学研究の方向を明らかにする。

#### 研究方法

カントの「第一批判」（純粹理性批判）という根本的な問題を明らかにすることで難問に答を与えようとしたという視点から既存知識の真相を探る。書法の本質観に対する研究では、主に文献分析法・比較分析法を採用し、著述・新聞・記述・日記・論文などの文献の分析を通じて、二十世紀初頭の「書法は美術である」と、その後の「書法は芸術である」という命題を提起した学者の文献の分析を通じて、客観的かつ論理的にその命題の背後にある立場や理論的根拠を検討した上で、書法と芸術との結合の妥当性を検討する。

書法美学の解釈の仕方に対する研究では、主に文献分析法を用い、書法美学の学術発展を推進する学者の書法美に関する記事や著作の分析を通じて、彼らの書法美学思想にある書法美に対する解釈の仕方を考察し、同様に文献分析法を用いて、「書法美学」と名付けられた著作における書法美の解釈の仕方及び書法美学の知識体系の構築の方式や立場を分析する。

#### 論文構成

本論文は三つの部分から構成する。第一部分の第一章は研究背景として、「書法は美術である」という認識の誕生についての考察である。第二部分の第二章から第七章は、二十世紀の書法美学理論に対する考察である。この部分は「書法は美術／芸術である」の理論的根拠と書法美の解釈の仕方の両研究で成り立っている。第三部分は終章である。この部分は二点あり、その一は、書法の本質観の研究である。その二は、書法美学の解釈の仕方（対象・範囲・方法・立場）についての研究である。

#### 各章の要旨

第一章は「書法は芸術である」という認識の誕生についての考察である。二十世紀初頭には「書法は美術である」という命題が現れたが、1920年代末になって「書法は芸術である」という命題が現れた。それでは、なぜ最初に書法を「美術」に編入し、その後「芸術」に編入したのか。「美術」と「芸術」という両語の意味は同じなのか。これは「書法は芸術である」という認識の理論的根拠を検討する前提であるため、本章は研究背景として、「美術」と「芸術」両語の考察を行う。そのため古代中国の「美術」と「芸術」の概念の意味と、「美術」の訳語の生成と輸入を踏まえて、二十世紀初頭の中国における「美術」「芸術」の意味や使用状況を考察し、二十世紀初頭に現れた書法を「美術」とする言論を整理し、それを当時の「美術」「芸術」の意味と結びつけることによって、学者らが書法を「美術」と見なしたその意味を解析する。それによってなぜ書法を「美術」と見なすのかの根拠を解明する。

第二章から第七章は二十世紀の書法美学理論をめぐって、「書法は芸術である」という命題の理論的根拠と書法美の解釈の仕方の二つの問題について考察する。

二十世紀初頭から80年代まで、「書法美学」という研究分野は形成されておらず、書法美に対する解釈は断片的で分散している。第二章～第六章は1920年代から80年代までの書法美学理論の考察である。この部分はこの間に書法美学の学術進展を推進した学者（梁啓超、張蔭麟、鄧以蟄、宗白華、朱光潜、林語堂、李沢厚、劉綱紀）の書法美に関する言説を主とし、書法を芸術と見なす理論的根拠を検討しながら、その書法美学思想における書法美の解釈の仕方と立場を分析する。上記の学者のうち、梁啓超、張蔭麟、宗白華、劉綱紀には書法美を専門に論じる文章があり比較的詳細であるため、第二章～第五章の各章は梁啓超・張蔭麟・宗白華・劉綱紀の書法美学思想について考察する。鄧以蟄、朱光潜、林語堂、李沢厚は書法美を論じはしたが、鄧以蟄と林語堂の文章は短く、李沢厚と朱光潜は書法美に対する美学的認識は専門の文章になっておらず例証として散見するため、第六章では、鄧以蟄、朱光潜、林語堂、李沢厚の四人の観点を考察する。

第七章は80年代から二十世紀末までの書法美学理論の考察である。この間に、「書法美学」と名付けられた著作が多く現れた。これは「書法美学」という研究分野が形成され、比較的系統的な理論体系を築いたことを示している。稿者は複数の著書があり、体系性と影響力があり、80年代以降の書法美学の研究を代表できる学者、葉秀山、金学智、陳振濂、陳廷祐、尹旭の五人を取り上げ、それぞれの著作を考察する。すでにこの時期には、書法は芸術であることが広く認識されており、書法美学の著作はいずれも書法を芸術とする立場に立脚しているが、その背後の理論的根拠については論じていないため、葉秀山、金学智、陳振濂、陳

廷祐、尹旭の著作はどのように書法美学の解釈体系を構築したか、どのような立場から書法美を解釈したか、何を書法美学の研究対象・範囲・方法にするかについて考察した。

終章は上述の考察を帰納して、「書法は芸術である」という命題の理論的根拠と書法美の解釈の仕方の二つの問題をそれぞれ論じる。

その一は、書法の本質観の研究である。二十世紀初頭に書法を「美術」と見なす立場の考察と、その後の書法を「芸術」とする理論的根拠の考察に基づき、「芸術」概念の進展史に結びつけて、「芸術」概念の進展史と「書法は芸術である」という認識の進展史の二つの側面から書法と芸術の結合の妥当性を検討する。それによって書法の本質に対する観念を把握する。

その二は、書法美学の解釈の仕方（対象・範囲・方法・立場）についての研究である。二十世紀初頭の書法美に対する観照の萌芽から 80 年代頃までに、「書法美学」という研究分野が形成され、比較的系統的な理論体系を築いた。その体系化への進展における体系性のある書法美学の研究成果、「書法美学」と名付けられた著作の書法美学の解釈体系の構築、その研究対象・範囲・方法の比較考察を通して、書法美学研究の方法論を検討する。

最後に、考察した学者の書法美の解釈の立場を総合して、中国伝統美学思想を主な立場とするのか、あるいは西洋美学理論を主な立場とするのか、この二つの立場の長所と短所を分析した上で、中国と西洋の美学をどのように結合するかについて検討する。

#### (特色)

二十世紀中国の書法美学の進展に関する先行研究は、ほとんど書法美学に積極的な推進作用を果たした学者を対象として、主にその書法美学思想の考察と揭示を行うものである。但し、書法の本質の問題と書法美学の解釈の仕方について言及したものは僅かであり、いずれも詳しく論じていない。管見の限り、この二つの問題を統合的に研究するものはない。よってこのような研究自体が特色のある研究といえる。加えて、書法の本質に対する観念を客観的に把握することは、書法美学の研究だけでなく、あらゆる書法理論の研究にとっても重要な課題である。また、二十世紀の書法美の解釈の仕方を総括し検討することは、現代の書法美学研究の方向や方法を学理上でより厳密に把握することができる。この点においても特色のある研究であると考えられる。

### 3. 論文の審査内容

各章の審査内容を記述する。

#### 第一章 研究背景としての近代「美術」概念の輸入をめぐる中国「書法」の変質

二十世紀の書法美学を研究するには、第二部分（第二章～第七章）で考察する学者たちが「書法は芸術である」という命題の理論的根拠を探究することは不可欠であるとして、「美術」と「芸術」の両語の明確な概念と用法が確立される経緯を、古代中国における両語の意味、近代日本における翻訳語「art」の意味、「美術」の近代中国への輸入、二十世紀初頭の「美術」と「芸術」の両語の使用状況、そして書法を美術とする言論から論証している。

二十世紀初頭の中国では、「美術」は先端技術と見なされ、工芸的・技術的・美的な物事はすべて「美術」とされ、「文明の花」と「民族競争のもの」という社会的意義さえ与えられていた。一方、「芸術」は二十世紀初頭には依然として技術・技能の意味をカバーする言葉として使われ、二十世紀初頭十年余は、いまだ「芸術」と「美術」が混用され、極めて複雑な局面を形成しているが、五四運動（1919年）の頃には、「美術」「芸術」の明確な概念や用法が最終的に確立され、工芸、技術の属性を含む概念から「造形芸術」に変わったと指摘する。

さらに最初に書法を「美術」とする言論はこの時期に誕生するが、学者たちの言う、書法は「美術」であるという立場が一致していないと指摘する。例えば、1902年前後に梁啓超が書法を美術に列入したのは、梁氏から見れば書法が一種の「技術」であるからであり、孫宝瑄の1903年の日記は書法を美術の範疇に列入していることから、「美術」は「精技」の意味であり、1907年に王国維は「古雅の美学における位置」で書法を美術の範疇に列入したのは書法の美の属性による判断からであり、劉師培、鄧実、黄節らの国学に深い造詣を持つ知識人を代表とする晚清国粹派では、「保守、愛国、存学」のために書法は中国の「旧学」としての「美術」の枠組みに組み込まれ、「美術」は「精技」や優美の内包と合致すると指摘した。

「美術」と「芸術」の両語の明確な概念と用法が確立されるにつれ、書法は「美術」から

徐々に「芸術」に変わっていき、「書法は芸術である」という命題が後の学者によって肯定され、この命題は書法に対する認識の観念として広まるとともに、美学上の言説観も相ついで展開して行き、「書法は芸術である」の命題は書法の本質的な定義であるだけでなく、書法美の解釈にも貫かれていることから、二十世紀の書法美学の研究の実態を考察するには、後の学者が書法を芸術とする理論的根拠について解明することが不可欠であると結ぶ。

以上、本章は「書法は芸術である」とする命題の理論的根拠を丁寧に検討しており、最初に書法を「美術」とする言論が現れたのは梁啓超の「中国地理大勢論」（1902年）であるなどの新知見を含んでいることから、的確であると認めうる。

**第二章 梁啓超の書法美学思想の考察：**梁啓超は、二十世紀の初頭では「美術」を「高等技術」と見なしたが、1922年頃には明確に「造形芸術」の立場を取るようになったこと、毛筆の使用が書法となる根拠として把握しているが、「書法は芸術である」という命題を支える理論的根拠にはならないこと、また「書法指導」（1927年）において、「光の美」や「個性を表現する」ことを美と見なすのは、西洋美学の影響を受けたものであることなどを論証しており、的確であると認めうる。

**第三章 張蔭麟の書法美学思想の考察：**張蔭麟は、英国の美学者ボサンケーの美学理論である「同心一体説」に依拠した「中国書芸批評学序文」において、書法を「先験的形式」に分類し、「書法は芸術である」との命題を明確には解決できていないものの、西洋美学に関する理論と概念を用いて初歩的な書法美学体系を構築したこと、書法鑑賞については、条件、仕組み、内容、基準から論じて論理性と体系性を持っていること、1931年に「書芸」の専門学科の建設を提起した先見性などを論証しており、的確であると認めうる。

**第四章 宗白華の書法美学思想の考察：**宗白華は、書法の本質の解釈に老荘思想を用いて書法と連携させ、書法の本質を検討するための一定の理論的根拠を提供したこと、「意境」の創造が美学思想の根本であると捉えて、その構成の特徴を「道」「舞」「空白」の三つにまとめたこと、中国芸術の「意境」は芸術における「道」の表現であり、「道」は意境が生成する哲学的根拠であること、リズムとは「生命の韻律」であること、『易』鼎卦の「正位凝命」という君子の品性に対する解釈を中国の「空間意識」を表現するために用いたこと、西洋の美術用語である「空間」に中国伝統哲学の内包を与えたことなどを指摘する。加えて、書法の空間感覚は力・線・律動によって創造し、音楽、舞踊、絵画と通じ、「虚実相生」を芸術の「空間」作りの表現法とするだけでなく、書法を含む芸術の美とも見なすことは、中国伝統美学の立場から書法美を解釈するものであると指摘する。また、ベルの「意味のある形式」論を借り、「蓄積論」と結びつけて書法美の本質を概括したこと、さらにアンリ・ベルクソンを代表とする「生命哲学」は、梁漱溟、熊十力、馮友蘭、朱光潜、方東美などの中国の学者たちに影響を与えたが、宗白華は西洋の「生命哲学」における物質の「運動」から、中国伝統美学における「生動」へと立場を転換したことは、彼の意境理論と結合して更に中国美学の内包を豊かにし、その発展をもたらしたと指摘する。

「書は芸術である」という命題については、漢字の「象形性」と「筆」の二つの論点を提起するが真に解決しておらず、書法美の解釈の仕方については、中国古典美学の立場に立脚し、書法美を意境美とし、西洋美学理論における「空間」「生命」の概念を中国の伝統哲学の「虚」「実」「生命」と連結して中国の伝統美学に内包を与えたこと、この「中体西用」の解釈の仕方は書法美学の研究にとって新たな方法を創造したことを論証しており、的確であると認めうる。

**第五章 劉綱紀の書法美学思想の考察：**劉綱紀は、「書法是一種芸術」（1962年）とその後の『書法美学簡論』、『書法美』、『中国美学史』等の著作で、書法を芸術とする理由は、漢字の形式構造と毛筆機能の発揮に要約した。この見解は宗白華とほぼ同じであるが、宗氏が漢字の形象による意境が書法を「芸術の境界」に達せさせると考えるのに対し、劉氏は漢字の象形性から発してより「形式美」の論述に傾くため、「書は芸術である」という命題の理論的

根拠に欠けていること、書法美の解釈に対しては、カール・マルクスの「反映論」に依拠して、「書法芸術の美は現実生活の中のさまざまな物事の形体美と動態美が書法家の脳中で反映されたものである」と主張するが、結局は機械的に反映論を適用するに陥ったと論証し、一方で、あらゆる神秘的な唯心的な議論を打破して、唯物論の視点から書法美を解釈したことは、二十世紀の書法美学理論の構築に対する新たな試みであり、新たな理論的空間を切り開いたと指摘しており、的確であると認めうる。

#### 第六章 他の学者の書法美学思想の考察——鄧以蟄、林語堂、朱光潜、李沢厚

梁啓超、張蔭麟、宗白華、劉綱紀の成果に比べ、鄧以蟄と林語堂の文章は短文で、朱光潜と李沢厚は書法美に対する美学的認識が専門的な文章にはなっていないものの、例証として散見するため考察対象としたとする。

鄧以蟄は、「書法は芸術である」という命題について、クローチェの芸術定義を基準とし、書法を「純粹美術」としてとり挙げたが、依然としてこの命題の背後にある理論的根拠を解決していないこと、書法美の解釈の仕方については、「性霊」と「意境」の二つの範疇を巡って書法美の本質を論じ、その「性霊」の内包は中国の古典文献の「性霊」と異なり、クローチェが提起した「直覚」と一致していること、全体的に見ると「中体西用」論で、書法美学の進展に一定の理論基礎を築いたことなどを論証しており、的確であると認めうる。

林語堂は、「書法は芸術である」と考えているが、この命題の背後にある理論的根拠については毛筆の使用に言及するだけであること、書法美に対する論述は、少なくともイギリスの形式主義美学とベルクソンの生命美学に類似すること、気韻、筆勢、筋、骨、肉などの中国の伝統書法の観念に、「抽象」「線」「バランス」「輪郭美」など多くの西洋の形式分析法の美学概念や範疇を取り入れていること、よって書法美の解釈には中西結合の方法を用いたことが明らかであると論証しており、的確であると認めうる。

朱光潜は、リップスの「感情移入説」とグロースの「内的模倣説」を総合し、独自の「感情移入理論」を形成して書法の審美心理の分析に可能な方向を示すとともに、書法美の本質の探究にとって新たな思考経路を提供したことは重要な意義があるが、「感情移入理論」そのものが、境界の最高の芸術造詣は「化境」であるとする評価基準が書法に応用されていないと論証しており、的確であると認めうる。

李沢厚は、書法の芸術成因論という問題に注目して宗白華の「筆墨特性」の論調を継承したこと、書法美の解釈では、形式的立場の分析に立脚して書法美の表現問題から着手し、書法美は線の表現に由来するものであると指摘したこと、イギリスの美学者クライヴ・ベルの「意味のある形式 (Significant Form)」論 (形式と内容を統一する理論) を導入して、自らの「蓄積」論と結び付けて改変し、書法美の本質を概括しようとしたことを論証しており、的確であると認めうる。

#### 第七章 「書法美学」と名付けられた著作における書法美学の解釈の仕方の考察

##### ——葉秀山、金学智、陳振濂、陳廷祐、尹旭を中心に

1980年代以降、書法ブーム・美学ブームの時期に、「書法美学」の著作がある学者五人が、どのように書法美を解釈したかを考察した。葉秀山 (1935-2016) の『書法美学引論』は西洋哲学と美学理論を用いて書法美に関する問題を解釈し、その哲学的思惟と多様な視点は、ある程度書法美学研究の視野を広げたと指摘する。金学智 (1933-) の『中国書法美学』は、西洋美学理論を用いて書法美の性質を検討し、古籍文献中の鑑賞・評価に関わる言説とその社会背景を結びつけて、書体・全体・個人の風格、および歴代の美学思想の考察を行っており、膨大で多次元の書法美学の理論体系を構築しているが、書法美の「原理」が「解釈」にまで説き及んでいないと指摘する。陳振濂 (1956-) の『書法美学』等の著作の書法美の解釈の仕方は、西洋美学理論を踏襲して書法美学の理論探索の枷をうち破り、書法の実践経験に基づいて古代書論から観念を抽出し、さらに書法の実際と結合して書法美学の原理や規律性のある認識をまとめ上げて書法美の特殊性を際立たせ、書法美学の理論の探索に新し

い研究分野を開拓したと指摘する。陳廷祐（1926-）の『書法之美的本質与創新』は書法美学への探索が終始伝統的な素朴な書法美の経験論にとどまっておらず、論理的思弁や方法論が不十分であるため書法美学理論の学術性に乏しいと指摘する。尹旭（1942-）の『書法美』は劉綱紀の『書法美学簡論』と同様に、マルクスの「反映論」を用いて書法美を解釈し、書法美の本質問題においても古代書論にある「一葉横舟」「千里陣雲」などの記述を書法美の根拠としていることから、客観的事物の美および主体的精神の表現と書法美との関係を解明していないと指摘する。但し、書法美学の研究課題についての思考は非常に詳細で、書法美学理論の進展の可能性からすれば参考価値があると指摘する。

総じて、書法の本質的な問題については、これらの理論の研究成果はすべて書法の芸術性の分類の問題を重んじており、書法と芸術との関係や理論的根拠の解明は重視されていないこと、書法美の解釈では、民国時代（1911-48）と比べて、80年代以降の書法美学研究の方が、体系化する傾向が明らかであること、その体系化に向けての研究の深さと広さは、従来の研究成果を進展させていると指摘する。また著作の研究範囲について見ると、これらの理論の研究成果が関わっている書法美学研究の内容は、書法美の芸術性質の分類、書法美学の審美範疇の研究、書法と審美心理、書法美と伝統文化、書法美と他の芸術との関係、古代の書法審美思想、書法美学史といった分野が含まれていることから、書法美学の研究領域が格段に拡大したと指摘しており、的確であると認めうる。

### 結章

「書法は芸術である」という命題の理論的根拠を探究する上で、「美術」と「芸術」の概念をめぐって、二十世紀初頭では書法を「美術」と見なす立場が学者それぞれで異なること、その後二十世紀末まで「書法は芸術である」という観念が広がったにもかかわらず、「なぜ書法が芸術なのか」の問いは依然未解決であると指摘し、「書法は芸術である」の観念は現代人の「追認」であるとの知見を提起する。この知見から「芸術」の概念の変遷を見ると、二十世紀には芸術の汎化と内包の拡張がありながら、依然として書法を芸術とみなすことから、書法は「芸術のための芸術」の産物と化し、これが書法理論研究の方向性にも影響を及ぼしていると指摘する。書法にとっては、古代哲学思想の内包や歴代社会の政治・文化との繋がりが極めて密接であることから、書法に対する観念はより一層文化的性質を重視すべきであると提起する。

二十世紀初頭の先駆者の書法美に対する言論の萌芽から、30-40年代には西洋美学が浸透し、50-60年代の停滞期を挟んで、80年代には「書法美学」という研究分野が形成された。80-90年代の書法美学の著作は比較的系統的な理論体系を築いてはいるものの、「書法美の根拠と特徴」と「書法の芸術性質」を研究対象とする異なる認識があり、このことは研究範囲の画定にも影響を及ぼし、現代の書法美学研究では美学の研究と芸術学の研究を混用している。そのため書法美学の研究は美学研究における一分野として、美学の一般原則に従い、形而下の具体的なある種の芸術ではなく、形而上の「書法美」を書法美学の対象とすべきであると主張する。さらに、二十世紀の書法美学理論の研究成果は、書法美の源泉問題、書法の性質問題、書法の審美範疇の研究、書法と他の芸術との関係の研究、書法美学思想史、風格史など内容が多岐に渉るものの、その多くが芸術学の研究領域にも属しているため、書法美学の研究対象としては、少なくとも書法美の本質、表現形式、審美趣味、審美心理等を含むべきであると主張する。

西洋の美学理論を用いて書法美を解釈する論述は、書法の形式面だけを問題視するため、書法の特異性を完全に把握できず、中国の美学理論を適用する方式は、明確かつ具体的な概念と標準に欠けるため、科学的・客観的・論理的な論証によっては書法美を明確に説明できない。具体的には書法の本体に着眼し、概念と範疇の解釈において、西洋美学の理性的な論理分析と経験の実証科学を組み合わせ、より広い歴史的、文化的、社会的、心理的、地域的な枠組みの中で、西洋の現象学、人類学、心理学などの関連理論を用いて書法美の社会的な

研究を行う必要があると主張する。

以上の指摘、提起、主張は、全て概ね妥当であると認めうる。

総じて、本研究は、中国書法之美とは何の美なのかという、書法美の本質を解決しようと果敢に探究した論考である。そのため、二十世紀の中国書法美学に関する文献から、各学者が「書は芸術である」という命題を通して書法の本質をどのように解釈したかの実態とその課題を論証し、書法美学を構築するための切り口と基盤を探求し提起した。このような研究方法、すなわち二十世紀百年の中国書法美学の研究の実態を考察し、検証して、各学者における研究成果を評価し問題点を指摘するという論証の仕方は、従前にはない評論スタイルの論考となっている。その結果、近代中国における「なぜ書法は芸術であるか」との本質的問いは未解決のまま現代の普遍的な一般認識になり、80年代以降には「書法とは何か」の解釈に関する議論が芸術の枠組みの下に限定されたと総括したことに基づく、書法美学体系構築の提案に留まっている。よって今後さらにより厳密で深化した書法美学の研究を持続することによって、一書法美学者としての見解を明確に提起できることを期待する。

#### 4. 文学研究科「博士学位論文の評価基準」による論文の評価

##### 1. 研究テーマの適切性

二十世紀初頭に「art」の日本語訳から輸入された、近代の西洋の概念としての「美術」「芸術」の概念を基に、中国古代より哲学（美学）概念として認識されてきた「書法美」の本質を解明せんとする研究テーマは、明確な問題意識に基づく適切な設定である。

##### 2. 研究方法の妥当性

中国、日本、西洋の歴史文献と現代文献を解釈して論証する研究方法は、極めて一般的で妥当であり、本研究ではそれをより丁寧かつ精確に行なっている。多数の学術論文を引用してこなれた日本語に翻訳し得ていることはその証左である。但し、西洋の文献を中国語訳で解釈し、それを日本語として表記する場合には、日本語訳の文献も参照すべきであろう。

##### 3. 研究史への対応の適切性

二十世紀百年間の中国書法、中国美学および西洋美学に関する多数の先行研究を咀嚼しながら、研究成果を中国書法美学の研究動向の中に精緻に位置づけており、適切に研究史に対応していると認められる。

##### 4. 論旨の明確性・一貫性

論旨の展開は極めて明確で一貫性があり、研究テーマに則した結論が導かれていると認められる。

##### 5. 構成・表現の適切性

論理的思考を日本語で表現する能力を十分に兼ね備えており、かつ全八章三部構成を明確に関連させており、学術論文として適切に構成されていると認められる。

##### 6. 学術的・社会的な貢献

二十世紀中国書法美学研究の実態を、多くの文献を詳細に検討しつつ、将来の書法美学の構築に向けての基盤を提示した先駆的研究として、十分に独創性があり、中国書法美学の研究のみならず、日本の書道美学研究にも一石を投じる研究成果を有していると認められる。

#### 5. 結論

2023年8月4日に主査・副査担当予定者による、梁開印氏の博士学位申請論文予備審査委員会を実施し（副査1名オンライン参加）、論文の提出が可能であると判断した。2023年11月15日、博士学位申請論文審査委員会に論文審査を委嘱されてからも引き続き直接の指導を行い、2024年2月9日に口述試験を実施した（副査1名オンライン参加）。各委員が本論文に対して質疑し、梁氏はそれらの質問に率直に誠実に回答した。軽微な誤読の修正意見がなされたものの、従前にはない新しい評論スタイルの論考であることと、丁寧な論証による新

たな知見の提起が高く評価され、審査委員会は口述試験を合格と判断した。

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする学位審査委員会は、梁開印氏が博士（書道学）学位を授与されるに適格であると全員一致で判断したことを茲に報告する。